

142 着物の楽しみ方（その2）（2022年12月22日）

前回（*）に続いて、ケ・ブランリ美術館で開催中の KIMONO 展のコレクションの中から、着物の楽しみ方をご紹介します。

四つ目は、着物が洋服に与えた影響を知ること。展覧会では、着物の影響を受けた 18 世紀の部屋着（写真右）や 19 世紀に輸出向けに作られた着物風のドレスを見ることができます。特に 19 世紀後半以降は、ジャポニスムブームもあり、異国情緒を楽しむヨーロッパ人に着物の人気が高まりました。着物に留め金を付けて羽織る女性が描かれた絵画とその女性が着ていた着物が並べて展示されているのを見ると、当時のファッション



アイテムの一つとして、西洋風にアレンジされた着物が取り入れられていたことが分かります。着物は現代のデザイナーにもインスピレーションを与えており、着物の影響を受けた独創的なデザインの洋服（写真左）も展示されています。着物によって、洋服のデザインの幅が広がっていることが分かります。

五つ目は、着物のコーディネートを楽しむこと。着物にはボタンや紐は付いていませんので、着物を着るときは小道具が必要になります。右の写真では、グレーがかった水色に花柄が描かれた着物の上に、ピンク系の格子柄の帯を巻き、帯の上に緑色の帯締めを巻いて着物がずれないようにし、帯の上部には黄色の帯揚げを巻いています。花柄と格子柄の組み合わせは、洋服ではあまり考えられません。水色、ピンク、緑、黄色といくつかの色を使っていますが、ちぐはぐな印象を与えません。これには秘密があります。実は、着物に描かれている花には、ピンク、緑や黄色が使われています。



帯、帯締めと帯揚げといった小物の色は、着物の柄に使われている色なので、違和感がありません。このように、着物は、洋服では合わせることが難しい色や柄を組み合わせることができます。その組み合わせは無限大です。着物と洋服のコーディネートの仕方を比較しながら観るのも、楽しいのではないかと思います。

六つ目は、見えないおしゃれを知ること。展覧会では、イギリスかフランスから輸入されたコットンのプリント生地を使って、19 世紀に日本で作られた襦袢（写真右）が展示されています。襦袢とは下着のことですから、人に見せるものではありません。日本人は、見えない部分のおしゃれも楽しんでできました。



最後に、実際に着物を着ること。これは、展覧会で体験することは難しいですが、フランスでも着物を売る店を見かけるようになりました。着物を着て歩くと歩幅が狭くなり、袂（たもと）が汚れないように腕の動きにも気を配ります。着物は、慣れないと動きにくいと感じますが、着物を着ると不思議と気持ちが引き締まります。

着物と洋服の大きな違いは、着物は一枚の反物から作られることです。長い反物から、身頃、袖や衿に必要な長さに切って、縫い合わせます。全て長方形ですので、型紙は必要ありません。洗濯するときには、着物をほどいて長方形のパーツに戻します。子どもが成長すれば身長に合わせて仕立て直しをしますので、着物はほどこことを前提に縫っています。着物は、サイズだけではなく、薄い色の生地であれば、染め直しをして生地の色を変えることもできます。このように、着物は、時代や着る人に合わせて調整することができます。古典的な柄は、時代を問わず愛されています。ですから、親から子へ、子から孫へと、世代を超えて着物を受け継いでいくことができます。現代では、着物は高級品になっていますが、実は経済的な側面もあります。

素敵な着物のコレクションをご覧になって、ぜひ着物の良さを知っていただきたいと思います。また、日本人として、着物文化を大切にしていきたいとの思いを新たにしました。

* 141 着物の楽しみ方（その1）

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100547701.pdf>

ケ・ブランリ美術館「KOMONO」展 <https://quaibranly.fr/en/exhibitions-and-events/at-the-museum/exhibitions/event-details/e/kimono>（英語）